

無関係な関係、適切な距離 空白の定義

中澤有基 Nakazawa Yuki

2017年5月11日[木] — 5月28日[日] 月曜休廊 11時 — 19時 金曜日は20時まで

[アーティスト・トーク] 5月13日[土] 17時～

写真家・齋生田兵吾を聞き手に、中澤有基が自作や本展覧会についてトークします。

中澤有基(なかざわ・ゆうき/1980年生まれ)は、写真家として活躍する傍、写真ギャラリー「gallery Main」(京都)の運営のほか、「京都写真教室Tract」の運営、写真集出版レーベル「CITYRATpress」のメンバー、数多くの写真展の企画・運営など、「写真」に多角的・積極的に関わっています。

中澤は写真の中に「何か」と「何か」が認識されることで「関係性」が生じ、そこに世界が現れること、また、「何か」と「何か」の位置や距離という視覚的な要素が、そこに現れる世界に変容をもたらすことへの興味に端を発した作品制作に取り組みます。本展は、この“視覚”と“認識”への問いかけの一端として、写真における「白」に着目した作品によって構成されます。

20世紀半ばに登場し、90年代末には一般的なものとなったインクジェットプリントは、支持体となる紙にCMYKのインクを載せる(あるいは浸透させる)形式による印刷技術です。では、白を支持体(紙)の色に依存するインクジェットプリントにおいて、私たちが知覚する「白」とは何でしょうか。それは、対象から写し取られた実際の「白い色」であり、対象に強く射した「光」の反射であり、あるいは余白としての「紙の色」そのものでもあります。言い換えるなら、インクジェットプリントにおける白は、少なくともこの3つの可能性を持つものであり、白の「正体」を明確に規定できない存在であると言えます。しかし、それでも私たちはその白を、記憶や経験、イメージや色の相関関係などから「白」と「光」と「紙」とに判別して認識しています。

本展において中澤は、“Relation, Appropriate distance”シリーズの作品群を発表します。作品はその配置において左右や前後の順番に関係性を持たず、またすべて日常を取材したスナップショットには、特別な物語りが生じることのない、ありふれた風景が写し取られています。しかし、そのいずれもが画面上に露出を極端に上げることで際立った様々な「白」を持っています。

鑑賞において、その「白」は一瞬では「正体」を定めることが難しく、鑑賞者はその正体不明の白が存在する「世界」を認識できない時間に直面します。そして、その後「白」への認識を進めるに従い、その関係性において周囲の世界を獲得していく体験をすることになります。また、この白は「地続き」となって本来は無関係なイメージをつなげ、あるいはまったく異なる記憶とつながりながら、鑑賞者の中に“視覚”と“認識”による新たな世界が立ち上がることを促すのではないのでしょうか。

※5月13日[土] 17時より、聞き手に写真家・齋生田兵吾(ギャラリー・バルク前回展作家)を迎え、中澤が自作や本展について語るアーティスト・トークを開催します。

※本展は「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017」のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。

C.V

中澤有基 | Nakazawa Yuki (<http://nakazawayuki.jp>)

1980年生まれ、京都市在住。2002年ビジュアルアーツ大阪卒。galleryMainを主宰するなどギャラリストとして活動しながら写真作品を発表。主な展示に『震える森、焦点の距離』(2013/gallery 9 kyoto)、『無関係な関係、適切な距離』(2016/galleryMain)など。アートフェア『FOTOFEVER ARTFAIR PARIS』(Carousel du Louvre)に2014年2015年に連続して出展。外部での写真企画やディレクションなども積極的に行なう。

デジタルカメラで写真を撮った時に、露出過多になった部分が真っ白になってしまう事がある。抜け落ちた白は別世界へ繋がっている何かに見える。デジタル写真において世界は数値化されたデータで表され、モニターでは光(RGB)となり、インクジェットプリントでは色(CMYK)になる。過剰な露出を与えられ光に蒸発した風景は、インクジェットプリントではインクの乗らないただの紙となる。それはいったい、写真なのだろうか、紙なのだろうか。本展では光(過去の現実)と紙(今)と白が地続きになり、見る者に新たな知覚を問いかける。 — 中澤有基

When I took a picture by digital camera, the part over exposed became pure white. It looks like the entrance to another world. In digital photography, the world is expressed in numerical data, becomes light (RGB) on the monitor and color (CMYK) in inkjet printing. In inkjet printing, a certain scenery that evaporated into light by given excessive exposure is just paper without ink. In this exhibition, the photograph will be connected with light, white, paper. It will be a query about perception. — Nakazawa Yuki

[視点]

カメラは単視点であり、その点から見た時、同心円状に距離と焦点が生まれ、遠近(パースペクティブ)が発生する。同時に、“焦点が合っていない”も生まれている。それは人間の目も同様である。(反対に多視点とは単視点が複数ある視点で、全てを直進に焦点を合わせることができ、対象の捉え方によっては遠近感を失っていく。例えば一枚の紙に同じ大きさの人間とりんごを焦点を当てて描くことが可能だ)

考えてみれば、意識の中でも現実でも、事物そのものには焦点や距離などは存在しないのではないだろうか。りんごを想像してみる。そのりんごに個性はなく焦点はあっているのではないだろうか。そして、現実のりんごそのものには焦点はなく、焦点を合わせているのは見ている側だということ。焦点とは受動的な存在で、能動的には発生しない。

そして、焦点には距離を内包しており、距離には2点が必要となる。

単視点で見る現実世界には、2点以外にも間や背後が存在し、パースペクティブが発生している。写真を撮るとは単視点で現実世界を四角く切り抜くこと、それが根本的な写真の出发点であり構造だった。

[主体と客体]

見る・見られるで言うと、かつて写真とは、撮影者と被写体の間にカメラを挟むという直線上の3点構造だった。その3点は直線上にあったので、あたかも撮影者を主体、被写体を客体とする2点が結び直線だと認識してしまう。

現代、ドローンに搭載したカメラで撮影ができる。ここでは撮影者(操縦者)とカメラと被写体の3点が物理的な直線上から外れることで、3点の存在が顕著化する。さらに、Googleによって世界中が写真になったいま、点たちは複数化し複雑化していく。Googleによって捉えられたブラジルの写真を日本でPCによってスクリーンショットしたとして、ここでは撮影者や主体や客体は曖昧になり捉えにくくなる。

そのスクリーンショットの主体と客体とはなんだろうか。写真は主客の関係から脱落した時にどういったものになるのだろうか。

[認識と鍵]

写真(印刷物)を撮った画像は何か。それはきっと写真を撮った写真として認識される。

白い壁を露出過多で撮影したとする。カメラの背面モニターには真っ白な画像と露出情報が写し出される。

PCで開いたその写真は、RGBをすべて振り切り、視覚的には空白であり、何も写っていない。しかし、その空白はデータ容量を持ち、メタデータで撮影は認識され、印刷したものは物質として存在する。その真っ白な紙は写真である。

我々は、デジタルというアクセスキーを使い、見えなかったものを知覚できるようになった。

【 展示について 】

[構造と制度]

壁に二つの写真がかかっていたとする。被写体同士や写真同士は無関係であったとしても、隣あえば関係をはじめてしまう。その間には様々なものが生まれる。時間、関係、補完、反発、相乗、など写真のテキスト(構造体)が生成される。まずその基本的な構造から始まる。

鑑賞者を点として、鑑賞者は展示空間に身を置いた時に様々な情報を知覚していく。空間の距離感や立体感、位置関係と全体の構成、写真に何が映っているか、さらには温度や匂いまでもを知覚しながら写真展を鑑賞することになる。(さらには雰囲気といったものまでも知覚してしまう。)五感が働き、無数のことを知覚している。写真が紙に印刷された立体物だということ。前後する関係による平面レイヤーの中の奥行き、など。そして、鑑賞者は展覧会の中で、画像や額や紙や構造に揺さぶられ、写真の中を鑑賞しているのではなく、展示空間という現実世界にコミットしていることに気付く。

そもそもギャラリーや額は制度であり、鑑賞者はその範疇ではないと考えるが、鑑賞者さえも制度の一部に組み込まれているのだ。現実的に、額に入ったアクリルには反射により自分自身が映る。それは物理的に向かい合うことでのみ発生する現実・事実で、そもそも写真を見るという構造には組み込まれていないものだ。

[鏡]

鏡を画像検索してみる。その画像上の鏡面は真っ白であつたリグレーのグラデーションがかげられたものがほとんどだ。鏡を想像してみてくださいと言った時に、何かが写った鏡を想像しないのではないだろうか。

鏡とは比較的写真に近い不思議な存在ではないだろうか。

想像や概念としての鏡は、白やグレーなものとして鏡そのものを認識できるのに、画像を写した現実の鏡は、画像の客体としての存在となる。

例えば、どこかの部屋で“鏡にこちらを見ている人が映っている”とする。その人は鏡を通してこちらを見ている。その鏡を部屋とともに写真に撮る。するとその写真は、“こちらを見ている人が映った鏡”がある部屋の写真となる。

写真は“鏡に人が映っている”を“人が映った鏡”へと変容し、人の主体的な視線だと認識したものは、鏡の中で客体化し、主客が反転する。鑑賞点よりその写真を見る時、人の視線、鏡の視線、鑑賞者の視線、が重なり合い、見る・見られるが交錯することを知覚できる。

[名称と個性]

名称とは指し示す言葉であり、名前とは個性を決定するものとして、事物や現象には、全てに指し示す言葉があるわけではない。名称や名前のついていないものもたくさんある。

ここに写っている被写体たちには全てに名称はあるが、個性はない。個性のない被写体たちは、どこにでもあるものであり、事件性やドラマ性を帯びていない。

知っているけれど共有できない、という状態だ。

[距離と関係]

被写体と撮影者は距離により関係が変化する。手の届く場所に居る人(物)を撮る時、関係性が写ってくる。

では遠くにいる人(物)を写したとき、関係は絶たれるのか。無関係へ限りなく近づいていこうとするがそれは可能なのだろうか。しかしまた、無関係もひとつの関係ではないのだろうか。

頭の中で想像したりんごは個性のない概念であり、その距離は定めることができない。

写真はサイズを選択することで、その距離感(実際の距離ではない)をコントロールすることができる。それは関係を変容させることができることであり、ますます写真は事実を写すものではないことがわかる。